

日本港湾経済学会年報

港湾経済研究

横浜港・その課題と展望

NO.29

1991

日本港湾経済学会編

序

日本港湾経済学会会長 北見俊郎

30年という年月は、ひとつの組織が成熟するのに十分な時間のように思えます。振り返ると昭和37年の秋、この横浜で日本港湾経済学会が産声をあげました。

当時、わが国経済は成長の揺籃期にあって、港湾が必ずしも産業界の期待する機能を発揮していない事情にあったことから、さまざまな現象が「港湾問題」として各界の関心を集めました。あるときはそれが港湾に対する政策的介入を促し、またあるときは港湾諸産業の自助努力として対処されたものでした。それらは合理化であったり、近代化であったりしたものです。そうした現象にたいする対症療法が、そのまま本質に作用して「新しい秩序の形勢」に発展した部分もあれば、また別な港湾問題に変質して、ちがった現象としてあらわれたこともあります。こうして「港湾問題」は質的变化を繰り返しながら、30年が過ぎました。

この間に学会のはたした役割の一つに、「問題」に対する客観的な理論形成があります。30周年を記念する全国大会の共通論題が「横浜港・その課題と展望」であるのは、まさにそうした意味での現代的テーマといえましょう。周知のように横浜港には全方位的な機能が備えられており、それだけに表出する問題の領域も広範に亘ります、横浜港の課題はわが国の総ての港に共通する課題でもあるわけです。そこには港湾の造成、法制、財政、行政、管理、運営、経営、産業、労働、流通、環境等々きわめて広範囲にして根深い諸問題が含まれています。横浜港の現実を論ずることは、総ての港の現在あるいは未来の問題を論ずることにつながります。

この「港湾経済研究」No.29には、数多くの自由論題も掲載されております。これらは独自の問題意識にもとづく研究の成果で、きわめて有意義な学会活動でもあるわけです。例年にくらべて特に活発な研究活動が展開され、一段と質の高い論文が数多く寄せられました。さらに別途、学会創設30周年を記念する冊子が「港湾経済研究」No.30として刊行されます。

重ねられた数多の業績を振り返って、ゴールへの距離は計りしれませんが、「港湾経済学」形成の一里塚を通過したように思います。30年という年月の重みを感じます。それらは総て会員諸兄の貴重な足跡でもあるわけです。

学会がこうして活動を続けてこられたのも、理事・評議員をはじめ各部会の幹事、事務局の方々、法人会員・団体会員として学会を支えてくださる港湾関係の方々、そして真摯なご研究を玉稿としてお寄せくださった研究者の方々、各部会幹事の皆さん、編集委員の諸兄、そして「年報」にしてくださる文化印刷株式会社等もろもろの方々の献身的なご努力によるものです。最後になりましたが、特に本年度については、記念事業をめぐるさまざまな活動に、横浜市をはじめ神奈川県、港湾関係諸方面の方々からのご尽力を賜りましたことをここに報告し、心から重ねて感謝の意を表させて頂く次第です。

1991年・秋

目 次

序	北見俊郎	
研 究		
共通論題		
横浜港における港湾産業の生産力構造の推移と展望	松橋幸一	(1)
都市機能と港湾機能	遠藤幸子	(14)
国際港湾都市「横浜」の課題と展望	山村学	(27)
港湾の背後圏と物流	鈴木暁	(38)
横浜港とR. H. プラントン	長尾義三	(51)
自由論題		
大日本帝国統治下の朝鮮の港湾	千須和富士夫	(62)
韓国西海岸諸港湾の連繫に関する考察	朴餅洪	(77)
中国の内河港湾の発展と改革について	宋建生	(92)
港湾事業の民営化に関する理論形成	金亨泰	(106)
港湾行政について	中本昭夫	(123)
製品輸入と港湾運送事業の役割	三村真人	(135)
港湾研究領域拡大の検討	柴田悦子	(149)
沖合人工島の建設と保護	藤井敬宏	(161)
地方における港湾経営とウォーターフロント		
開発について	針谷莊司	(175)
ウォーターフロント開発政策と日本経済構造の転換	木村武彦	(192)
横浜港と市民生活	堀野正人	(207)
京浜工業地帯の形成と物流体系	谷任	(218)
港湾のパラダイム転換	富田功	(236)
資 料		
邪馬台国のみなとと貿易	小合彬生	(250)
書 評		
柴田悦子編著『国際物流の経済学』	荒木智種	(267)
富田富士雄、小林照夫		
柴漁業協同組合編集委員会編著『蒼穹の下漁鱗輝きし地』	安彦正一	(268)
山上徹著『国際物流のネットワークと港』	大浜慶和	(272)
学会記事		
第29回全国大会(川崎港)概要		(276)
シンポジウム概要		(277)
部会活動状況他		(284)
編集後記		(285)